



<同志社人が母校を誇りに思える情報>

「同志社ファン・レポート」

Ver.2-026 号

新島襄から学ぶ その3 脱国作戦



新島が箱館に居た期間は55日間である。その間に脱国に理解し、協力してもらえ外国船の船長をどのように探して、了解を取り付けたのか。

今号では、その経緯を探ってみる。

この間の記録は『新島襄全集第5巻』の「函館紀行」と「航海日記」にあるが、簡略で、一部、違いがあるので同志社大学文学部教授の井上勝也先生の『新島襄 人と思想』の「箱館時代の新島襄」(p.1~20)を参考にまとめた。

* * *

新島が快風丸で品川沖を出港したのは、元治元(1864)年3月13日午後3時30分。箱館港に到着したのは4月20日。時間が掛かったのは、所用の他に、風に状況からいくつかの港に寄港し待機していたからである。

函館到着後、早速、武田塾を訪ねたが、武田斐三郎(たけだ あやさぶろう)(1827~1880)は居なかった。武田は伊予大洲藩士、蘭学者。箱館で武田塾を開き、蘭学、航海術、砲術、築城、造船、化学を教えた。五稜郭の設計、施行監督にも携わっている。その武田は、江戸の「開成所」の教授として赴任するために江戸に向かっており、教を乞うことが出来なかったのである。

新島は武田斐三郎に会えなかったので塾頭の菅沼 精一郎(生没年不詳)に相談した。菅沼は数日後、ロシア人の司祭ニコライを新島に紹介した。

ニコライは修道士名で、本名はI.D. Kasatkin(1836~1912)。

新島はニコライ宅に住み込み、ニコライに日本語と日本文化を教え、新島はロシア人の士官から英語を学んだ。新島はニコライに密航計画を話したが、思いとどまるように言

われた。

ニコライに断られた新島は武田塾の塾頭・菅沼から沢辺数馬を紹介してもらった。

沢辺数馬 (1835~1913) は、箱館・神明社の宮司。沢辺は新島にポーター商会に勤務の福士卯之吉を紹介した。

福士卯之吉 (1841~1912) は父子で洋船「箱館丸」などを建造。後に英国人ブラキストンから気象観測、地形測量などを学び、北海道の気象や測量事業の指導的役割を果たしている。福士は英語を難破船の1等士官から学び、日英の件名辞典を編集している。このように福士は英語と近代科学を理解した国際人であった。

福士はセイヴォリー船長と会う機会を作ってくれた。それだけでなく、脱国の前夜、小舟を漕いで沖に停泊していたベルリン号まで新島を送っている。

セイヴォリー船長 W.T.Savory (1827~1897) は、新島と6月12日にポーター商会で会い、新島の「天父の思想を学びたい」との強い願望がキリスト教を信じるセイヴォリー船長の心を動かし、新島を乗船させることを決めた。

しかし、密航を援助したことが会社に知れ、上海で船長を解雇されている。

ポーター商会の A.P.Porter (1827~1891) はポーター商会の会長。新島が6月12日にポーター商会で船長と会ったときポーターはその場にいたはず、因ってポーターも新島の密航を幫助した一人と言えよう。

.....

私が作成した DVD が次のサイトで紹介されていることが、今回、見つけました。

<https://blog.goo.ne.jp/goo5comodo/e/ccc6175de0ecf94c1ccac4f554c555dc?fbclid=IwAR2N-BiXSmUvoX212yDYpupl4hiAekb4odHLd1EKr7m7Jumhq9WDkjVWQHU>

『新島襄と幕末の箱館』展 於、市立函館博物館

<ブログ>

『新島襄』展は二階で開かれていて、左の階段を進みました。

ふと見ると、階段の踊り場のテレビで新島襄に関するDVD上映をしているようであったので、足を止めました。

DVDのタイトルは『新島襄・箱館での55日間 *脱国をほう助した人々* 』

14分ほどの短いものであったが、たいへん濃い内容のDVDで、新島襄の密出国がいかに危険で、発見されれば協力者もろとも極刑という中、大勢の協力者を得ておこなわれたことであるか、を教えてくれた。

.....

新島は、このようにして函館という初めての土地で、外国船で脱国することができた。それも55日間という短期間に実現している。力を貸してくれた人は、「幫助罪」で罰せられ

る可能性があるが協力を得ている。新島襄の何が目的達成に結びついたと言えるのでしょうか。ご意見、ご感想をメールでお寄せください。それを OB/OG で共有化したいと思います。つきましては、お寄せいただいた内容は、原則、つぎの「同志社ファン・レポート」で公表します。文章には、氏名・学部・卒業年を添えてください。お待ちしております。

<読者の皆さんからの投稿>

上田彰二様 1962年 経済学部卒 山岳部 OB

世界最高峰エベレスト（8848メートル）に初登頂した平林克敏さん（84）がこの度、『エヴェレストが教えてくれたこと』（山と溪谷社刊）を出版されました。平林先輩は同志社大学山岳部の大先輩です。

1960年と1963年の二回、同志社大遠征隊で副隊長を務められました。結果、ネパールのアピ、サイパルの7千メートル峰をどちらも初登頂されました。又、1985年日中友好合同登山隊を組織し ナムナニ峰（7694m）初登頂カシュガルからチベット高原に達する5000キロの踏査と学術調査を実施されました

平林先輩は、同志社大学卒業後、1957年に関西電力に入社され、黒四ダム建設に携われた。その後、日本ダンロップゴムに移られ、住友ゴム工業の専務取締役などを歴任された。

平成10年に登山と企業から学んだ人生哲学『熱き心—登山と企業から学んだ私の人生哲学』（ぱるす出版）も出され好評でしたが、この度の著書の<青年に贈る十章>も感動しました。

<青年に贈る十章>

- 1・夢とロマンを持つ
- 2・常に可能性を求める
- 3・安易な道を選ばない
- 4・体験し、学ぶ
- 5・強固な意志を持つ
- 6・個人と国家を考える
- 7・国際性を身に付ける
- 8・豊かな感性を養う
- 9・競争より個性を
- 10・正々堂々と生きる

ぜひ、お勧めしたい。

.....

次は、宇治郷毅様から前号の内容にハイレベルな情報を付け加えて載せました。

宇治郷毅様 1966年 法学部卒

<宇治郷毅(うじごう・つよし)氏のご経歴>

1943年岡山県生まれ、
1966年同志社大学法学部卒、
1968年同大学院法学研究科修士課程修了、
2003年国立国会図書館(副館長にて)退職、
2007~2013年同志社大学社会学部(教育文化学科)
および同大学院社会学研究科教授
2013年叙勲(「瑞宝重光章」)受賞、
主著:『詩人尹東柱への旅』緑陰書房2002、
『石坂荘作の教育事業』晃洋書房2013]

新島襄が藩公認(「在籍離藩」と言う)で江戸を出て、快風丸で函館に行くことができたのは、新島が欧米の学問を学び、教育による立国(直接には同志社創立)を実現する幸運の第一歩になりました。ここからは多くのことを学ぶことができます。

第一は、新島が大志(「千里の志」)を持ち、それを貫いたこと。
それは私利私欲を離れた純粋なものだったので、多くの協力者を得て成功につながりました。加納格太郎からはその後の運命を左右した貴重な情報を得ました、また上司である安中藩目付役飯田逸之介からは藩主への斡旋の労を取ってもらいました。また船の所有者である松山藩主からの乗船許可には旧友塩田虎尾(松山藩士)の親切な周旋の労がありました。その背後には新島の用意周到で誠実な働きかけがありました。ここが吉田松陰との決定的違いです。

第二は、新島が勇気と忍耐の人であったこと。
いずれ函館からの脱国(失敗すれば死罪)を心に秘めていた先生の勇気はすごい。それは蛮勇ではなく忍耐と祈りにささえられていました。

第三は、新島が、三人の恩人(加納、飯田、塩田)に対し終生感謝の気持ちを忘れなかったこと。新島は恩義を重んじる人でした。■